

## 歴史を読み解く : さまざまな史料と視角

服部, 英雄  
九州大学大学院比較社会文化研究院 : 教授 : 日本史

<https://hdl.handle.net/2324/17117>

---

出版情報 : 歴史を読み解く : さまざまな史料と視角, 2003-11. 青史出版  
バージョン :  
権利関係 :

### 3 久安四年、有明海にきた孔雀

#### はじめに

海上の道 『海上の道』とは柳田国男やなぎたくにおの代表的な著書の題名である。そして我々も「海上の道」の存在を実感することが多い。

自由な行き来が可能という意味での大航海時代は、訪れて、まだそれ程古くはない。前近代、蒸気船の登場以前の航海技術は、確かに潮流や季節風を大いに利用するものではあったが、むろん、それらに強く規制されるものであった。風上に向かって進むことのできる帆船は、当時の日本にも中国にも存在しなかった。薩摩・甕島の遠見番所、火立番所の勤番は二月から九月までに限定されていた。十月から一月（旧曆）までの冬期間、勤番が不在であったのは、北風が卓越するこの季節には、西から異国船が来ること自体があり得なかったからである（『里村郷土誌』上・三〇〇頁）。海上の道とは、ある意味では一方通行の不定期な季節列車がとおる鉄道のようなものであったが、反面、鉄道のようにきまりきった道を通るわけでもなく、その時々々の潮流や風波の影響を受けて、しばしば到着すべき駅が、当初の予定駅とは異なることさえもあるやっかいな道なのであった。

五島と有明海 五島列島の北端、小値賀島おぢかに手紙の入ったフィルムケースが漂着し、発見されたことがある。それは福岡県柳川市の小学生が流したものだっただけという。若干の年月が経過していたようで、そ

の小学生から話を聞くことはできなかつたようだ。しかし有明海と五島を結ぶ自然の潮流は確かに存在していた。両者のきずなは太く交流の歴史は長い。

## 一 有明海と日宋貿易・研究史とその問題点

A 長秋記にみる神崎庄と宋船——宋船は有明海に入ったのか——

さて古代、中世の日本と中国の海上交通を考える際に、過去の研究史において一つの対立する論点があった。大陸の各港を発した船が到着するのは、博多のみであったのか、それとも有明海にも船が入ることがあったのかどうかである。

この対立する議論は、具体的には『長秋記』の長承二年（一一三三）八月十三日条の解釈をめぐる議論である。この時、宋人周新の船が「神崎御庄領」に到着し、通例によつて大宰府の官人が「存問」（臨検）し、「和市の物」（相当の代価）を支払った。ところが、鳥羽院の院司であつた平忠盛が「院宣」（鳥羽院の命令）であるといつて下文（命令書）を出し、「船が院領神崎庄領へ到着したのに、大宰府が貿易に介入することはおかしい。院が直接に貿易を行なう」と主張した。『長秋記』の著者、源師時は「日本弊亡不足論」、「外朝恥辱」をも顧みない忠盛ら近臣は「如猿犬所為也」、猿や犬のような行動であると怒りをあらわにしている。

## B 先学の説

森克巳説 さて、この記事はふつうに読めば、肥前国神崎庄の津に宋船が到着したということになるから、有明海に面した港津に宋船が到着したものと読むことができるはずである。地理的な距離があつた

からこそ、院と平忠盛は大宰府の関与を排除しようとしたのだろう。事実多くの研究者はそうした立場、有明海説をとってきた。森克巳『日宋貿易の研究』（昭和二十三年・一九四八）には、「この荘は有明海に面してをり、従つてこの方面にも投錨港が存在したことは想像される」（二六一頁）、「肥前神崎庄は、その地理的關係より、古くから貿易船の寄泊地として現れてをり……」（五〇三頁）といった記述がみられる。

竹内理三説　また竹内理三『武士の登場』（昭和四十年・一九六五）では、神崎庄の位置を説明したのち、「現在では筑後川の流しだす泥砂のため有明海の海岸線が遠く退いているが、以前には有明海もはるかに深く湾入し、大陸からの船がこの湾内に奥深く入港してきた。近世の初めごろまで、有明海奥深い伊倉の港には明の貿易船の入港があり、伊倉の近くには明人の墓が現在もあるほどである。」と記し、明人墓の写真を掲載する（二五七―二五八頁）。

長沼賢海説　ところが、こうした大方の読み方に対する異論が古くからも、また最近にもある。古くは長沼賢海『日本海事史の研究』（一九七六）所収の「国際混血児」（初出は一九五三）である。

宋商周新の着岸したのは、肥前の本荘ではなくして、倉敷地關係の博多に入津したのであらう。肥前に漂着したのではなく、鎮西太宰府に着岸したのである。神崎荘の海岸は筑後川の川口西岸に位置し、ムタ浜が多く、現在それが常に問題になつてゐる。此の方面の泊としては昔は佐賀郡牛津（\*正しくは小城郡）であるが（今、海岸より奥へ一里）、唐船などはとても来泊できず、又神崎荘の外でもある。

五味文彦説　新しくは五味文彦『大系日本の歴史5・鎌倉と京』（二九八八）がある。

では貿易船は有明海のどこに到着したのであろうか。しかし今もみられる広大な干潟はそうした良港の存在の堆測を拒絶する。いったい唐船がわざわざ有明海にはいつてきたのであろうかという疑問さえ生ずる(二六一頁)。

宋人の通事が多にもつていた所領をめぐって神崎荘の荘官が訴えたり、あるいは神崎荘の「留守」人が管崎宮や大宰府の官人に訴えられたりしている。すなわち博多は神崎荘の荘領だったのであり、それは神崎荘の倉敷(年貢積みだし地)として設定されたものであろう(同頁)。

長沼、五味両先学の発想は全く共通している。五味氏の見解の後半部分は、石清水八幡宮文書目録『石清水八幡宮文書』の記述に基づく。

一通 承久元年十一月 通事船頭光安宛所博多管内并所領等、任<sub>ニ</sub>先例<sub>ニ</sub>可<sub>レ</sub>為<sub>ニ</sub> 御庄領<sub>ニ</sub>之由、神崎庄官等重奏聞解状

通事(通訳)給分が博多にあつて、神崎庄側が博多(のうちのあゝ一部)は庄領であると主張していた。網野善彦説 さて五味著書以後の研究としては、網野善彦『日本社会再考—海民と列島文化』(二九九四)があげられる。網野は五味の指摘する博多と神崎の関係について一応の評価は与えながらも、なお下中杖遺跡(佐賀県神埼郡三田川町)からの越州窯青磁の出土等、考古学の成果により、「従来の説のように、有明海を活発な海上交通の行われた場として考える」と、有明海のもつ可能性に期待をよせる発言をしている。

ここでの視角 以下ではこれらの学説の再検討を行うなかで、古代末期から中世にかけての日宋、日明貿易における有明海的位置を考察する。そしてこの点を考える手がかりを、以下に求めることとした。

第一は、従来の研究において全く言及されなかった仁和寺に残された肥前国杵嶋庄に関わる記録である。そしてこの記録の検討のうちに、第二の手がかりを明側の書物の記載に求める。そして有明海の地理的特色について検討を加えつつ、中世有明海の実像を明らかにしていきたい。

## 二 肥前国杵嶋庄からの孔雀京上

御室相承記と仁和寺領杵嶋庄 御室、即ち仁和寺門跡歴代の記録である『御室相承記』という書物が仁和寺に残されており、国宝に指定されている。その中に次のような記事がある。

### 杵嶋庄進孔雀事

久安四年三月廿七日乙酉、進之、仍令進院、依御召也、而觀覽以後返給、仍賜真慶了

杵嶋庄とは肥前国杵嶋郡にあった莊園で、延慶二年（二三〇九）の仁和寺文書に「仁和寺南院領杵嶋南郷庄」とみえているように、平安―鎌倉期を通じて仁和寺の支配が行われていた（『鎌倉遺文』三二卷二三七六六）。杵嶋庄の名は、むろん杵嶋郡に由来するもので、正応五年（二二九二）の肥前国大田文おおたぶみによれば、杵嶋郡には西半に長嶋庄、東半の北部に「公田分」としての杵嶋北郷が、また南部に「庄藪」としての杵嶋南郷庄があった（『鎌倉遺文』二三卷二七九八四）。このことと、延慶にその地頭が白石氏であったことを併せ考えれば、今日の白石町、有明町の一帯がその故地と推定できよう。杵嶋郡のうち杵嶋山より東方、有明海に面した白石平野が、その故地であった。

孔雀の来朝 さて、いうまでもなく「孔雀」は中国南部から東南アジアに生息する鳥である。国内には

おらず、わざわざ院（鳥羽法皇）が見物する程の珍鳥だった。当然に孔雀は中国から、杵嶋庄を經由して京都に送られたことになる。

したがって、この記事は、『長秋記』にみる宋船が神崎庄に到着したという記事と並び、日宋貿易と有明海の関わりを考える上で、貴重な記事だといえることができる。早く大正十五年（一九二六）に刊行された『史料綜覧』にも引用されており、国宝指定物件でもあったから、研究者の目にはふれやすい史料だったはずである。昭和三十九年（一九六四）には奈良国立文化財研究所から『仁和寺史料 寺誌編一』として公刊もされている。しかしなぜかこの記事を利用して有明海の海上交通に言及した論考はない。平凡社や角川書店の佐賀県地名辞典類にも関説はない。

実はこの記事の直前には次のような記事もある。

自<sub>レ</sub>院被<sub>レ</sub>進<sub>ニ</sub>鸚鵡<sub>一</sub>事

久安三年十一月廿日庚辰、被<sub>レ</sub>進<sub>レ</sub>之

仁和寺宮・覚法法親王は外国の鳥に強い関心があった。孔雀も鸚鵡おうわもその登場は当時としては大変な出来事であったから、関連する記事が他の日記や記録の中に多くある。これまた明治四十三年（一九一〇）と、古い時代に編纂された『古事類苑』の「動物部」に関連記事が収録されている。その記事とは、保元の乱の立役者、藤原頼長の日記『台記たいき』と、平治の乱の立役者、信西しんせい（藤原通憲）の編纂にかかる『本朝世紀』である。以下に引用しよう。

〔台記〕

○久安三年十一月十日庚午

伝聞、(藤原忠通) 摂政、獻孔雀、鸚鵡於法皇、(鳥羽) 是西海莊所貢云々

○同廿八日戊子

法皇借給鸚鵡於(藤原忠実) 禅閣、余見之、舌如人、能言是故歟、他聞其鳴、無言語、疑是依漢語、日域人不聞知歟、

○久安四年四月五日壬辰

申孔雀於(崇徳) 新院見之、仁和寺法親王所獻云々、其尾頗似画孔雀、其体貌美於去年孔雀

○同 六日癸巳

今日返獻孔雀

〔本朝世紀〕

○(久安四年閏六月) 五日辛酉、内裏災上之由、被行大祓、(略) 抑去春頃、太宰府博多津、宋朝商客渡孔雀及鸚鵡於本朝、即獻宇治入道大相国、(藤原忠実) 大相国被伝獻法皇、又仁和寺法親王自商客之手、伝得孔雀、同被獻法皇、御覽之後、各被遣返本所、又青毛亀一頭、自鎮西獻入道相国、同被獻法皇、御覽之後、同返遣、法皇内々仰稽古之輩、被勘吉凶、粗申不快之由云々、又入道相国仰直講中原師元被勘之、申吉祥之由、但至于孔雀鸚鵡者、先例申有火事之由云々、而今年自春及夏炎上連々、遂及皇居、可謂天火、珍禽奇獸不蓄国、誠哉斯言

頼長と信西 以上が関連する記事である。「日本一の大学生」としてその学識を誇り、一方では悪左府と恐れられた藤原頼長が「オウムの舌は人の舌にそっくり。よくしゃべるのはそのせいか。しかしこと

ばがさっぱりわからない。きっと中国語をしゃべっているのだろう。日本人にはわからない」と綴つてみたり、また「(ひろげた)孔雀の尾(羽)は絵と同じだ」などと興奮している様は、無邪気な子供のようでもある。

一方の信西が孔雀や鸚鵡を皇居の火事に結びつけているのは、いささか神経質に過ぎるようも思うが、鳥羽法皇も同じような懸念を示していたという。興味は津々。でも何だか不気味でこわい。当時異国のものを恐れる観念は相当に強かった。

孔雀は杵嶋庄から京上 さて上記の三史料に登場する孔雀や鸚鵡は、どれとどれが同じ鳥なのか、別の鳥なのか、いささか複雑である。そこで整理して理解するため別表を作ってみた。日を追つてそれぞれの孔雀、オウムの動きをみてみよう。

表2 久安三年(一一四七)から四年にかけて来朝した孔雀、オウム

久安三・ 同	十一・十 十一・二十	西海の莊園から孔雀A、オウムα、鳥羽法皇へ。(『台記』) オウムα、仁和寺宮へ。(『御室相承記』)
久安四・ 春	十一・二十八	オウムα、藤原忠実へ。頼長もこれを見る。(『台記』) 博多宋商より孔雀B、オウムβ、藤原忠実へ。次いで法皇へ。 また仁和寺宮、商客より別の孔雀Cを得、法皇へ。(『本朝世紀』閏六月五日条)
久安四・ 同	三・二十七 四・五	杵嶋庄より孔雀C、仁和寺宮を経て法皇へ。(『御室相承記』) 仁和寺宮から孔雀C、崇徳上皇へ。頼長が去年の孔雀Aより美しいとほめる。翌日仁和寺宮へ戻る。(『台記』)

するとこの二年間に三羽の孔雀が日本にもちこまれていたことがわかる。鳥羽法皇の心配は数の多さにもあったのだろう。仁和寺宮の孔雀について、『本朝世紀』は商客の手より伝え得たとしか記していないが、当事者の記録である『御室相承記』の記述に従えば、この商客は博多ではなく、杵嶋庄に到着していた。

すなわち有明海に面した肥前国杵嶋庄に、宋船が到着していたことが、古記録の叙述によって明らかとなった。もっともこのことについても異論が出されるかもしれない。たとえば杵嶋庄の倉敷もまた博多にあったとか、あるいは、杵嶋庄の庄官が博多にまで出向いて孔雀を入手した、といった異論が提起されるものと思われる。

しかし考えたいのは杵嶋庄と博多の距離である。両者は八〇キロメートルは距っている。休まず歩いて一六〇時間にかかる。往復四日の道のりである。そして一方では博多湾に面して、同じく仁和寺領の怡土庄があつたことも忘れてはならない。怡土庄には博多湾の良港、今津があり、同じく日宋貿易の拠点である。仁和寺が博多・宋商の孔雀が欲しかったのならば、博多からわずか一〇キロメートルの怡土庄が入手すれば良かったはずである。仁和寺の記録がわざわざ「杵嶋庄」と記述していることの意味をしっかりと受けとめたい。宋商と孔雀をのせた船は有明海に入り、杵嶋庄の沿岸にいきなり石を投じたものと考ええる。

**孔雀憧憬** 以上のように、当時の皇族、貴族、高僧らの孔雀、オウム熱にはただならぬものがあつた。とりわけて孔雀は仁和寺には重要だつた。孔雀は毒蛇を食う。その孔雀の背に乗るのが孔雀明王である。孔雀明王を本尊とする密教修法・孔雀経法は空海以来重んじられてきたが、とくに仁和寺・性信法親王

(二〇〇五)八五・寛弘二―応徳二)が得意とした。「孔雀経法は広沢の無双の大秘法なり」という言葉もある(速水侑「孔雀明王」平凡社日本史事典)。仁和寺周辺には、本物の孔雀への、ただならぬ関心があった。孔雀をみた覚法法親王は仁平三(一一五三)年八月十九日に「門跡相承本尊大孔雀明王同経壇具等事」に始まる起請文きしきもんを書いている(仁和寺文書、佐藤進一『古文書学入門』一九七一、二三〇頁、「平安遺文」脱漏か)。もつとも久安四年(一一四八)の内裏炎上後は不吉な鳥とみなされたい。熱も多少は醒めたはずだが、八〇年後の『明月記』嘉祿二年(一二三六)五月十六日条には、

伝聞、去今年宋朝之獸、充「満華洛」、唐船任意之輩面渡之歟、豪家競而豢養

とあるから、久安の頃に輪をかけた状況であつたらしい。そして著者藤原定家もまた、

珍禽奇獸、不<sub>レ</sub>育<sub>二</sub>于国<sub>一</sub>

と、信西と同じ言葉を記述した。

### 三 明書に登場する有明海の港津

次に長沼・五味両氏の博多倉敷説の前提にあつた認識、即ち「遠浅である有明海に宋船が入るはずはない」という見解について検討していきたい。

明書の港 明の時代には、日本についての案内書がいくつも作られている。『籌海図編』(総督尚書胡宗憲編・嘉靖四十年へ一五六一頃)、『図書編』(万暦五年へ一五七七完成)、『日本考』、『日本風土記』などがそれで、倭寇研究書である。記述はいずれも似たりよつたりというが、その中に日本の港津の書きあげがある。



そこでこれらから肥後、肥前の項を引用してみよう。なお正しくは筑後に属する港津も含まれている。薩摩之北為肥後 横直皆五百里、其奥為牙子世六（※ヤーツシユリユウハ代）、為阿麻国撒（※アマグオサリ天草）、為昏〔陀〕（※フオントウオリ本渡）、为一国撒介鳥喇（※イークオサチエニヤオラ、軍が浦・イクサガウラ）、為〔西撒昏鳥喇〕（※シサホウラ?）、為開懷世利（※カイホワイシリー川尻）、為嗒加什（※タアチヤシ高瀬）、為什達加（シータージャア高瀬、但し筑後）

又其北為肥前 横直皆五百里、其奥為鉄来（※テイエライ寺井）、為言奴気子（※イエンヌチイツウ榎津、但し筑後）、為法司奴一計（※フラスヌイチイ蓮池）、為客舍（クウシャ嘉瀬）、其内沿河泊舟交易之處（以下略）

○京都大学文学部国語学国文学研究室編『全浙漸兵制考・日本風土記』をもとに、秋山謙蔵「明代支那人の日本地理研究」〔歴史地理〕六一一、一九三三）、渡辺三男『新修訳註日本考』一九八五等により補訂し、さらに中国人留學生の教示を得て、私見により比定しなおした。例えば鉄来は従来、多比良に比定されていたが、テイエライと発音されるから寺井に比定した、など。

河口津 これらの港津の特色は河口津が多いことである。竹内理三が強調した伊倉は、高瀬港の対岸である。高瀬即ち「嗒加什」である。菊池氏による遣明船の出発地と推定されるが、菊池川の河口にあつた。また相良氏が遣明船「市来丸」を出航させた八代、即ち「牙子世六」は球磨川の河口にあたる。川尻は緑川、瀬高は矢部川の河口である。

筑後川河口の各津 そして筑後川の河口には、鉄来即ち寺井（津）、言奴気子即ち榎津、法司奴一計即ち蓮池の三港があつた。これらは現在では内陸にあるようにもみえよう。しかし中世の干拓地で

著名な肥前国河副庄南里は、この寺井津の二キロメートルほど西方である。中世に陸地であつた場所の標高と、海（干潟）であつた場所の標高を南里の一帶でみてみると、海は二・五メートル、陸は二・七メートルとなる。寺井津より海側の早津では部分的に二・三メートルという箇所もある。寺井津より南は、中世には満潮時、海になつた。他の各港津も今日では一見内陸にみえるが、矢部川、菊池川、緑川流域のいずれにも中世古文書の記述によつて、中世に干拓が行われていたことが確認できる地域があり、それらは上記港津より海側に位置するものばかりである。その中世の海を地図に併せて記入しておいた。なお南里についての詳細は服部「地名資（史）料論」（『中世資料論の現在と課題』一九九五・名著出版刊・所収）を参照されたい。

榎津も一見、内陸に見えるが、今日若津と榎津の間にある小流が、かつての蛇行する筑後川本流の痕跡であろう。現在のほぼ直線的に流れている筑後川は近世近代の河川改修の結果であり、かつての蛇行水路の痕跡は、今も肥前・筑後国境を継承する佐賀・福岡県境の線に示されている。

**宣教師の知識** この寺井津、榎津の二港については、ジョアン・ロドリゲス『日本教会史』（二六二二年頃、マカオで著述）にも登場する。

この国には筑後川と呼ばれる大河があり、この肥前の海の端で海に注ぐ。この両側に寺井と呼ばれる肥前の港と、榎津と呼ばれる筑後の港がある。

**神崎庄津・蒲田津** さてつづく蓮池は、旧筑後川本流よりわずかに佐賀江を遡った位置にある。その蓮池に隣接して蒲田津があつた。蒲田津は旧筑後川本流と佐賀江の合流点にあつた。蓮池と蒲田津は一キロメートルも離れていない。明書にいう「法司奴一計」は広義にいう蓮池であり、実際には佐賀江の下



図 11 蒲田津の「アラコ」

アラコとは、蛇行する川の屈曲点にできた深みの意またはその護岸施設をいう。石の坂は干満に応じて、道板をかけて使用する。その左右が本来の船だまり。正面の川は改修後の佐賀江。



図 12 蒲田津の商家のガラスに書かれた「肥料」の字  
左側にうすくみえている。

流蒲田津を含むものと考えたい。

肥前国絵図（角川日本地名辞典・佐賀県、一〇八一頁）に明らかのように、蒲田津と蓮池の間を流れる中地江川が神埼・佐賀両郡の郡境だった。蒲田津は神埼郡に属していた。蒲田津の「蒲田」は「蒲田郷」に由来する。神埼郡蒲田郷の名は、はやく『肥前国風土記』に登場しており、神埼庄に關係する多数の中文書にも「神崎庄蒲田郷」の名がみえている。即ち、この「神崎庄蒲田郷」の名を冠する蒲田津こそが、神崎庄津、旧筑後川の本流右岸・肥前国神崎庄の港だった。

蒲田津の繁栄 近世・近代にも蒲田津は繁栄した。五島列島からの魚粉をもとに作られる肥料が主たる取り扱い品である。ほかに江戸幕府より与えられた「御朱印」によるという葉の専売もあり、時には五島を中継地として大陸との葉の密貿易をしたとも伝承する。満潮にのつて上がり、引き潮にのつて下っていく。今日の蒲田津にはわずかに二カ所の船だまりの跡と、繫留する船が干満に応じて道板をかけた石段が残るにすぎない。それでも江湖（干満差のある川）の端に残る白壁の土蔵や「肥料」と書かれた商家の構えは、往時の繁栄を十分にしのばせてくれる。

みおつくし 有明海に代表される遠浅の海では河口津が発達した。瀬戸内海でいえば芦田川の草津（草戸千軒）、淀川の難波津をあげることができる。河川には干潮、満潮を問わず水深があった。干満差四・六メートルであれば、極端な表現をすれば干潮時、満潮時に落差四・六メートルの急流が出現するのである。その浸食作用は激しく、常に一定の水深が確保される。干潮時にも河川である部分を「濤」（みお、みよ）と呼ぶ。濤は満潮時には海のなかなになって、干潟と区別できなくなるので、濤の両岸には目印が立てられた。難波潟の風物詩でもあった「みおつくし」（濤標）がそれで、濤木などとも呼ばれた。

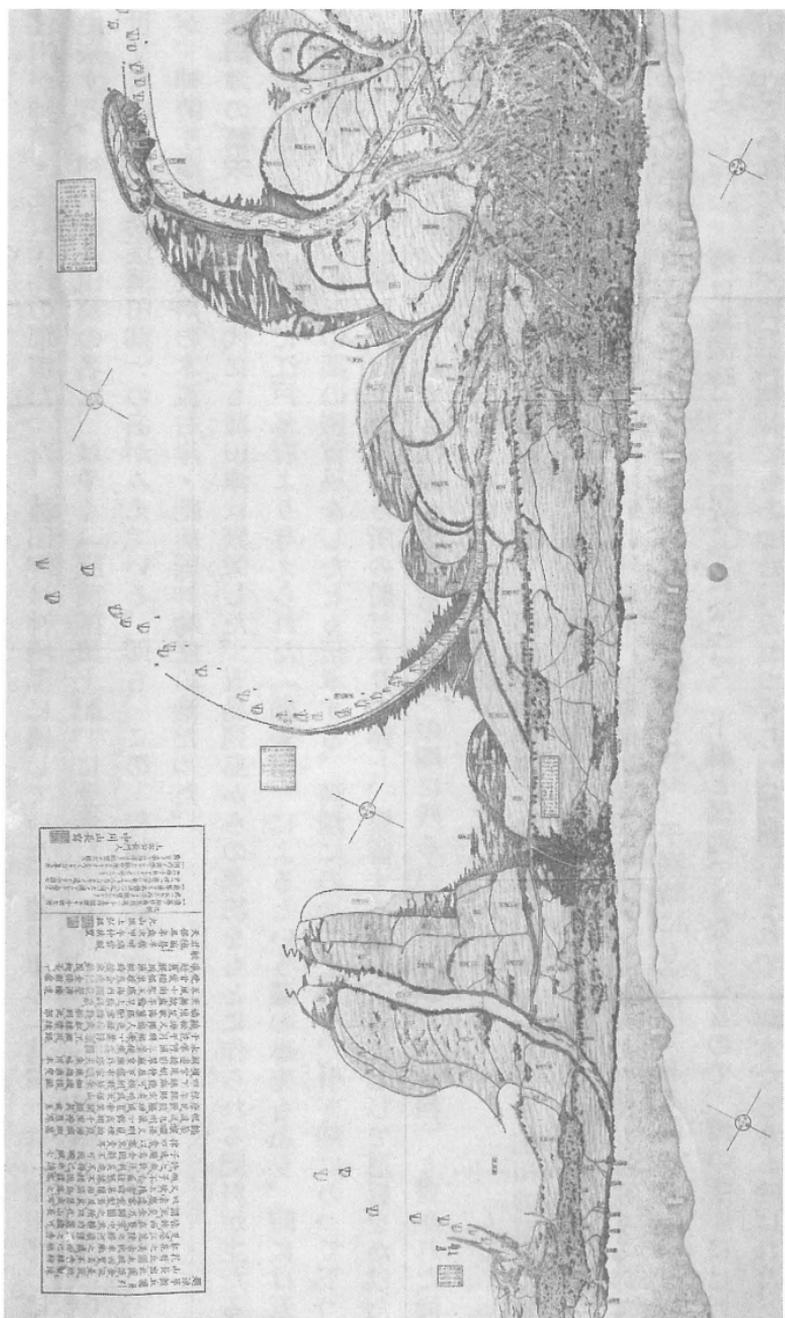


図 13 満潮にのり「みお」に入って内陸に進む船の列  
 「みお」を外れての航行は不能だった。天保 5 年 (1834) 大坂湾の光景 (『大湊一覽』、船の科学館蔵)

難波江の芦のかりねのひとつよゆゑ　みをつくしてや恋ひわたるべき（皇嘉門院別當）

わびぬれば今はたおなじ難波なるみをつくしてもあはむとぞ思ふ（元良親王）

河口は複雑でまちがえて他の川に入ることもあつたから、「みお」は川ごとに異なる指標となつてゐた。今も有明海の干潟には多くの「みお」がみられる。この複雑な地形の港津には「水先案内人」（みおびき）の存在も不可欠だつた。蒲田津での聞き取りによれば、水先案内人は島原、天草から乗つてくるといふが、宋船、明船の場合であれば、五島あたりから乗船することもあつたのであろう。

河川交通は鉄道開通まで大いに隆盛をみた。榎津は河川移動の関係もあつたものか、近世には隣接する若津に廻船問屋が設置され、そちらが筑後米の積出港として繁栄した。その様子を松尾俊郎「有明北岸低地に於ける土地と生活に関する記録」（佐賀県耕地協会編『佐賀県干拓史』一九四一、に再録）は生き生きと綴っている。一部を引用しよう。

「盛んな時代には若津港には遠く雑貨を積んだ大阪の汽船や、塩を積んだ中国筋の大帆船や、琉球糖を積んだ鹿児島船も頻繁に入港した。これら各地の船は帰航には此地方の物産を持って行つた。遠地の産物等は若津港を経由して、前海（有明海北半）沿岸の各港に送られた。」

「鹿島地方の船も若津港との交通が甚だ多かつた。満潮時に鹿島を出航し、引き潮を利用して東に航海し、干潮時までに筑後川付近、或いは其の下流の分流たる早津江川口付近まで行き、そこで潮の来るのを待ち、次の上り潮を利用して川を上つて若津に入港する。満潮から次の満潮までの間、即ち十二時間で達したのである。」

「ミヨの状態が川々によつて異なり、夫々の精通者でなければ分からない。ミヨの存在を示すミ

ヨ木が所々に立つてはいるが、このミヨは河中にある洲と共によく変化するので、安心出来ないものである。又、二三の近接した川（例えば浜川、鹿島川、塩田川、あるいは六角川、嘉瀬川、本庄川など）では、その各々のミヨが沖の方では合して、一本のミヨとなつてゐるものがある。だから沖から這入て来る船は、よく案内を知らなければ目的川のミヨを間違えて、異なつた川にはいる事がある。土地の船はミヨ木に一寸した目じるしを付て、各川の区別をしているようであるが、勿論之れも事情を知つたものでなければ利用ができぬ。

若津港のように汽船や大船の入港する處は、不案内の船に対して水先案内が居て、水の深淺を示して河口廻行の手引をしたのである。」

この叙述は近代の情景であるが、「みおつくし」（澤木）と水先案内人と、そして潮による大型船の乗入れは、古代中世以来かわらぬものだった。

さてこのようにみてくれば、「有明海に宋船が入るはずはない」とする先学の先入主は、実は実態とはかけ離れたものだったといわねばなるまい。先学には二つの点が忘却されていた。第一には有明海には、その自然の力、その恵みを最大限に利用した人間の知恵と営みがあつたということ。第二には、有明海に注ぐ九州一の大河、筑後川に直面して中世神崎庄が存在していたということ、この二点である。

長承二年、宋船が到着したのは肥前国神崎庄であり、蒲田津であつたと考える。荷揚げされた交易品は、それより「ちくぜんのう」（筑前繩手、筑前へ行く大道の意、三田川町鳥之隈にこの通称地名が残る。いわゆる西海道）を経て大宰府に運ばれた。

杵嶋庄津 神崎庄津、蒲田津については明らかになつた。それでは久安四年、孔雀とともに宋商たちが

到着した杵嶋庄の港はどこであったのか。

第一には六角川の河口津が考えられる。藩政期における六角川流域の河港には、高橋、牛津、砥川、また住之江等がある。高橋は六角川の潮位遡行限界点に位置し、はやく元徳二年（一三三〇）の小鹿島文書〔鎌倉遺文〕四〇巻三一〇〇六に「たかハしのいちハさいけ」（高橋市場在家）として登場する。しかし内陸であり、また杵嶋庄ではなく長嶋庄に属している。「一は（市場）高橋、二（荷）は牛津」といわれた牛津もまた隣接する砥川も小城郡である。六角川河口、住ノ江は大正期には貿易港の指定をうけていたが、北方炭鋳、大町炭鋳の石炭積出港のイメージが強く、近世中期以前の歴史がよくわからない。一方杵嶋（南郷）庄の南方には塩田川水系の廻里江（川）があり、その河港廻里津は白石平野の米の積出港として知られ、天草砂糖、甘薯の荷揚げも盛んで、慶長国絵図にも登場している。杵嶋庄津はむしろ廻里津を想定した方が良くかもしれない。

**有明海と日宋貿易・その再評価** 塩田川より南方、鹿島津を有する藤津庄も中世には仁和寺領であった。有明海岸には伊佐早庄、高来庄など仁和寺領荘園が多い（地図参照）。孔雀好きな法親王に象徴されるように、仁和寺は外国との交易に大いに関心があり、富をもたらす有明海を知悉していた。

寧波、杭州を出発した宋船は、最短路で五島列島に到着する。しかし玄界灘は波高し。玄界灘の危険性は文永・弘安の役が物語っている。大宰管内広域での交易を目的とする船や、何らかの事情で博多に入港できなくなった船は、玄界灘の荒波を避け得る内海・有明海に入港すれば良かった。

このように博多とならぶ大陸ともう一つの玄関として有明海を再認識してみれば、その歴史的重要な性もいや増してくる。杵嶋郡といえ、『公卿補任』の仁安二年（一一六七）の記事、平清盛がその地に

大功田を得たという記述が想起される。この給付を日宋貿易の観点から再評価することもまた可能であろう。

追記・蒲田津での聞取調査に際しては、柿永勇氏（昭和五年生）、樋口博視氏（大正十三年生）らのご協力を得た。